



## 佐賀県域における飲酒嗜好の地域的展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育学部 公開日: 2016-08-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 周作 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10458/5972">http://hdl.handle.net/10458/5972</a>

# 佐賀県域における飲酒嗜好の地域的展開

中村周作

## The Regional Development of Alcohol Preferences in Saga Prefecture

Shusaku NAKAMURA

### 1. はじめに

#### 1) 研究の目的

酒は、人類が生み出した至高の文化の一つであり、地理学においてもそれに関する多様な既存研究がみとめられる。ただ、酒に関する既存研究をひもとくと、その生産（青木，2003他）やそれに関わる労働に関するもの（松田，1999他）が大半で、その消費に関わる地域的な飲酒嗜好に関する研究蓄積が、調査の難しさもあって少ないことが指摘された（臼井・張，2010）。筆者は、そういった研究の空白部分を埋めるべく、地域的研究として、宮崎県域（中村，2009他）や、熊本県域（中村，2012）、大分県域（中村，2014）を事例とする一連の研究を行ってきた。本稿は、それら一連の研究の第4弾ということで、北部九州に位置する佐賀県域を事例とする。北部九州は、焼酎文化の卓越する中南部九州と違って従来、清酒文化圏として、わが国の大分の地域と共通する飲酒嗜好地域であったところに、数次の焼酎ブームの影響で焼酎嗜好が広がりをもせて今日に至る。したがって、佐賀県域での飲酒嗜好動向を把握することで、地域独自の状況を把握すると同時に、日本の大分の地域における飲酒嗜好とその変容をある程度見通すことが可能となろう。本稿の目的は、佐賀県域で、まず①税務署管内ごとの飲酒嗜好とその変容について把握すること、②より詳細な分析を通じて佐賀県域に展開する地域的な飲酒嗜好圏の析出を試みる。その上で、③わが国の清酒文化圏の飲酒嗜好とその変容について展望することである。

#### 2) 研究の方法

佐賀県全域、および県内の地域的な飲酒嗜好の概要を掴むためのデータとして、まず、酒類消費に関する公的な統計である『福岡国税局統計書』<sup>1)</sup>を使用する。この統計データでは、県内5税務署管内ごとの酒類別消費量とその推移を把握することができる。主要酒類として、清酒や単式蒸留しょうちゅう、連続式蒸留しょうちゅうなどが分類されているが、単式蒸留しょうちゅうに含まれるイモ、コメ、ムギなどの内訳や、当然のことであるが、実際に酒の販売に

関わっている現場の声などを得ることはできない。そのため、そういった酒類消費の詳細を把握するための現地調査を実施した。本研究でも、宮崎、熊本、大分各県域における調査と同じく、各地の小売酒販店を聴き取りアンケート調査の対象とした。一般に長い経営期間を通じて地域に根付いてきた小売店は、現在でも地元の一定のファンに支えられていると考えられる。したがって、それぞれの地域での各店舗での売れ筋を把握することで、当該地域の飲酒嗜好をかなりの精度で明らかにすることができる。佐賀県域に分布する小売酒販店のうち、新興のディスカウントストアやスーパーマーケットを除いた件数をNTTタウンページで検索すると、合計で313件を数えることができる。これらを各市町の世帯数と店舗数を勘案して全市町に割り振った60件の店舗にアンケート用紙を送付し、全店舗を回って、回収時に補足聴き取り調査を行った。その結果、57件の有効回答を得ることができた<sup>2)</sup>。なお、おもなアンケート・聴き取り内容は、①佐賀県域で嗜好される主要酒類である清酒、単式蒸留しょうちゅうに含まれるイモ・ムギ・コメ・ソバ、連続式蒸留しょうちゅう他の販売量（すなわち、消費量）の割合、②売れ筋銘柄（上位4位まで）、③特定の銘柄が、地域で支持されている理由、④近年の飲酒嗜好の状況・変化などである<sup>3)</sup>。

熊本、大分両県の調査では、酒販小売業の自由化以降の大きな変化として、低価格を売りにするディスカウントストアやコンビニエンスストアといった競合相手の出現による打撃が始まり、その後、ディスカウントストアも酒と肴を併売するスーパーマーケットに太刀打ちできずに縮小、コンビニエンスストアも過当競争と経営の厳しさより廃業が進むなどがあり、一般小売店の廃業による縮小が顕著に表れていた。今回対象とした佐賀県域においても、同様の理由で廃業による酒販小売業界全体の縮小がみられたものの、一方で、他県とは違った小売業に関する新たな展開もみとめられた。これについては、実態の報告の中で述べていく。

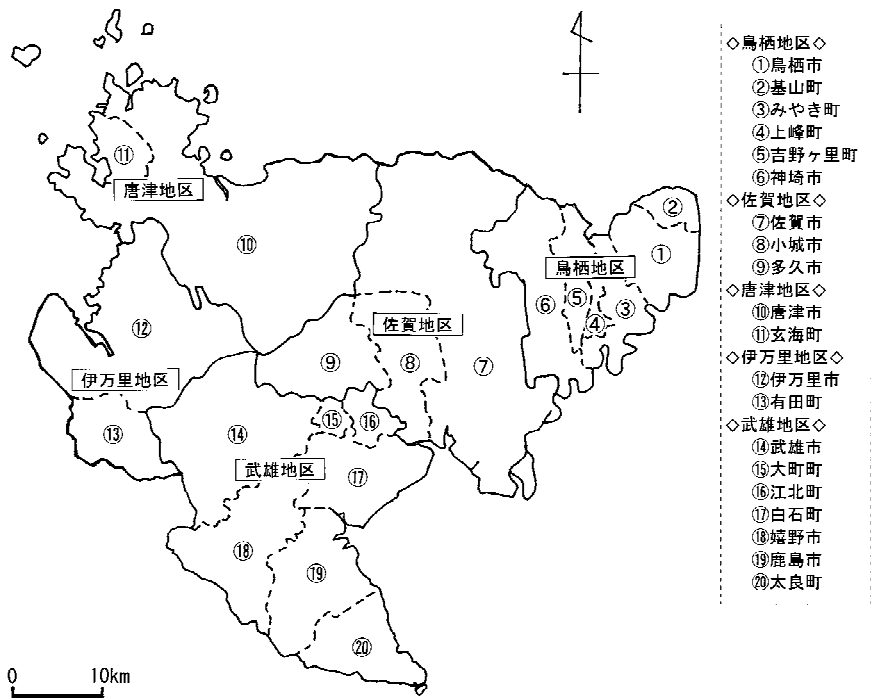
## 2. 地域の概観

佐賀県は、九州北西部、福岡県と長崎県に挟まれる位置にある。県の面積2440.7km<sup>2</sup>は、全47都道府県中の41位、人口83.3万人も同41位、世帯数29.4万も同43位という小規模県である。地勢的には、県東、福岡県境をなす脊振山系から県の北部を占める筑紫山地、それに連なる上場台地、杵島丘陵、そして長崎県境をなす多良岳山系といった山系群に取り巻かれて南半が自然陸化と干拓によって開かれた佐賀平野が広がっている。県北は、西に海食崖の卓越する東松浦半島、東に白砂青松の虹の松原が延びて波荒い玄界灘に接する。一方県の南には、遠浅で波静か、日本1の干満差を持ち、引き潮時に広大な潟が出現する内海の有明海が広がる。

歴史的には、戦国時代に竜造寺隆信が、現佐賀市水ヶ江に居城を設けていたが、島津に敗れた後、家老の鍋島氏が取って代わって江戸時代を通じて佐賀藩を治めた。領内にはその支藩である蓮池、鹿島、小城の3藩が置かれた。また、唐津は、一部に天領があった他、寺沢、大久保、松平、土井、水野、小笠原とめまぐるしく大名が入れ替わった。そして、明治に入り、廃藩置県後の紆余曲折を経て、同16（1883）年に佐賀県が設置されて今日に至っている。

以上のように、地形的には高い山など地域を分断するような障壁はみとめられないが、歴史的経緯もあって、小県ながら佐賀と唐津では住民性がかなり異なるとされるなど、地域的な個性の強い地といえよう<sup>4)</sup>。

本稿では、『福岡国税局統計書』等データを使用する関係で、以下、県内5税務署管轄区、す



第1図 佐賀県の市町村および税務署管轄区の分布

なわち，1. 鳥栖地区，2. 佐賀地区，3. 唐津地区，4. 伊万里地区，5. 武雄地区に分けて論を進める。まず，これらの5地域の概要について以下，説明する。

### 1) 鳥栖地区

鳥栖税務署管轄区に含まれる行政地域は，鳥栖市，神埼市，吉野ヶ里町，基山町，上峰町，みやき町の2市4町である。地域人口が17.3万人（人口はいずれも2015年国勢調査，全県比20.8%），面積が327.7km<sup>2</sup>（全県比13.4%）となっている。県の東部に位置し，工業都市である鳥栖や，いわゆる都市のベッドタウン，内陸農業など多様な展開をみせる地域である。

### 2) 佐賀地区

佐賀税務署管轄区に含まれる行政地域は，佐賀市，小城市，多久市の県央3市である。地域人口が30.1万人（全県比36.1%），面積が524.6km<sup>2</sup>（全県比25.6%）となっており，文字通り県の政治・経済の中心をなす地域である。地形的には，沿岸にまで広がる平野から筑紫山地と杵島丘陵に挟まれた谷口へと至る地域であり，都市的産業から米，大麦の二毛作が展開する平野農業，さらに干潟を含む内湾地域には，ノリ養殖や，当地独特の魚介類採捕業が展開する。

### 3) 唐津地区

唐津税務署管轄区に含まれる行政地域は，唐津市と玄海町である。地域人口が12.9万人（全県比15.5%），面積が523.5km<sup>2</sup>（全県比21.5%）となっている。県の北部，福岡県境から東松浦半島へ至るこの地域は，県第2の都市である唐津市を擁し，沿岸の漁業・港湾機能，上場台地

や内陸地域の農業など多様な産業が展開する。

#### 4) 伊万里地区

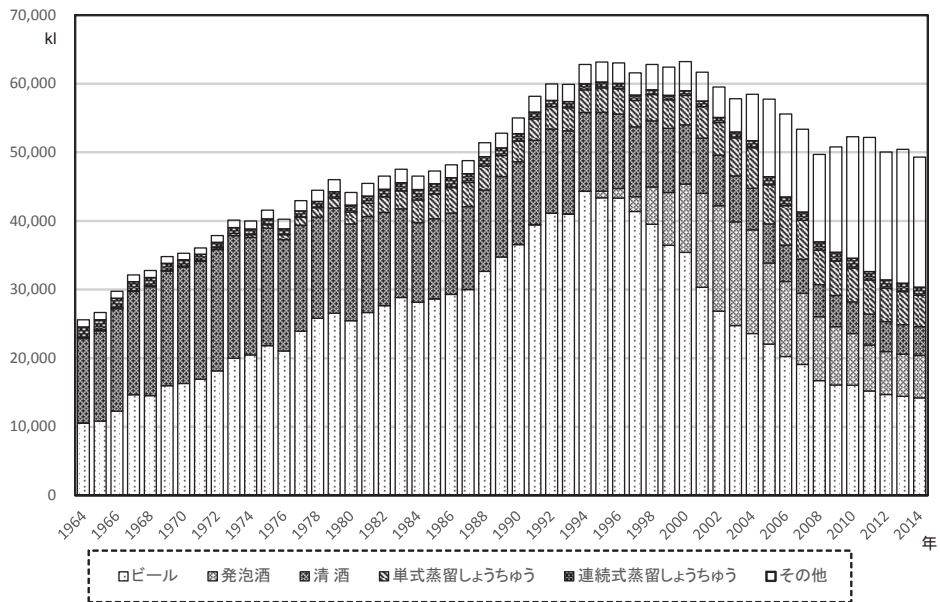
伊万里税務署管轄区に含まれる行政地域は、伊万里市と有田町である。地域人口が7.6万人(全県比9.1%)、面積が321.1km<sup>2</sup>(全県比13.2%)となっている。県の北西部を占める有田・伊万里地区は伝統的な一大窯業地帯として知られる他、肉牛、ナシなどの特産がある農畜産業地域でもある。

#### 5) 武雄地区

武雄税務署管轄区に含まれる行政地域は、武雄市、鹿島市、嬉野市、大町町、江北町、白石町、太良町の3市4町である。地域人口が15.5万人(全県比18.6%)、面積が643.8km<sup>2</sup>(全県比26.4%)ということで、面積上5地区最大となっている。県の西部、長崎県境へ至るこの地域は、温泉などの観光や米、タマネギ、レンコンなどの生産が盛んな平野・干拓地農業、山地斜面を使ったミカン栽培などで知られる地域である。

### 3. 佐賀県域における飲酒嗜好の地域的展開

本章ではまず、佐賀県で嗜好されるおもな酒類のうち、地域的特性を見出しにくいビール系酒類を除く、清酒、単式蒸留しょうちゅう、連続式蒸留しょうちゅうに関する飲酒嗜好の展開について、国税局データ、および小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査をもとに解説していく。



第2図 佐賀県の酒類別消費量の推移

『福岡国税局統計書』他より作成。

その前に、佐賀県における酒造りの歴史と現状について、若干言及する。佐賀県は昔から清酒処であった。明治初期には、県内に300を超える醸造場があり、出荷しやすいように鹿島、佐賀、唐津等舟運の便の良いところに酒造業が発達したとされる（北島，1971）。

当県には、酒造業者の組織として、「佐賀県酒造組合」がある。当組合主事山崎みち子氏によると、当組合は、1953（昭和28）年に結成され、当初加入酒造業者が大小81社あった。それが合併や廃業により1985（昭和60）年頃には44社、現在では27社となった。平成に入るところには小規模な業者の中には、自社製造をやめ、大手から酒を買って自社ブランドで売るところまで出てきた。そういった中、平成8～10年頃に、都会へ出ていたそういった小規模業者の後継者で、酒造業を再開するためにUターンする者が10名近くあった。意欲のある若手担い手が続々誕生し、彼らが協力して酒造りに取り組んだ<sup>5)</sup>ことで、佐賀県の酒造業界に新たな波が起こり、その対外的評価が高まるとともに、佐賀の甘口の清酒が全国的なブームを呼んでいる<sup>6)</sup>。

第1表 佐賀県市町別主要酒類消費割合

市町村名	清酒	単式蒸留しょうちゅう					連続式蒸留しょうちゅう	単位:%	
		イモ焼酎	ムギ焼酎	コメ焼酎	ソバ焼酎	計		その他	
1 鳥栖市	33.6	40.4	5.6	3.8	2.5	52.3	1.3	12.8	
2 基山町	45.9	22.2	14.9	2.4	1.5	41.0	2.4	10.7	
3 みやき町	16.5	50.0	16.0	0.0	0.0	66.0	17.5	0.0	
4 上峰町	41.0	31.0	2.0	1.0	0.0	34.0	25.0	0.0	
5 神埼市・吉野ヶ里町	29.8	21.4	12.7	4.8	3.9	42.8	6.9	20.5	
6 佐賀市	56.6	23.9	8.9	3.0	1.3	37.1	2.5	3.8	
7 小城市	55.6	17.1	7.5	5.1	2.5	32.2	0.6	11.6	
8 多久市	45.0	47.5	5.0	1.5	0.0	54.0	0.5	0.5	
9 唐津市	36.5	19.8	11.8	3.7	2.4	37.7	5.2	20.6	
10 玄海町	32.5	40.0	10.0	6.0	2.5	58.5	6.0	3.0	
11 伊万里市	31.4	30.7	10.6	4.9	1.2	47.4	7.5	13.7	
12 有田町	42.8	18.4	12.3	3.4	0.9	35.0	4.6	17.7	
13 武雄市	46.8	26.8	8.7	7.7	2.7	45.9	2.6	4.7	
14 大町町	35.0	20.0	10.0	5.0	2.0	37.0	3.0	25.0	
15 江北町	43.8	17.5	11.3	8.8	2.5	40.1	10.0	6.1	
16 白石町	68.3	12.0	5.3	0.7	0.0	18.0	0.3	13.4	
17 嬉野市	64.6	16.9	7.4	3.7	1.6	29.6	0.4	5.4	
18 鹿島市	67.1	16.5	3.7	1.0	0.0	21.2	1.0	10.7	
19 太良町	44.5	26.5	9.0	1.0	0.0	36.5	11.0	8.0	

資料:小売酒販店57件への聴き取りアンケート。

## 1) 酒類ごとの飲酒嗜好にみる特性

### a) 清酒

佐賀県は、もともと北部九州清酒文化圏に属する地域であり、かつては清酒の消費量が圧倒的に多かった。福岡国税局の統計では、全酒類の消費に占める清酒の割合が最も高かったのが1966（昭和41）年の50.1%であり、量的なピークが1973（昭和48）年の17,891klであった。何しろ1971（昭和46）年までは、清酒消費量がビールすら上回っていたのである。その後、しかし減少を続けて2015（平成27）年には、8.5%（4,184kl）となった（第2図）。ただ、先述の山崎氏によると、清酒には、純米大吟醸から上撰、佳撰まで多様な種類分けがなされており、ランクの低い佳撰や上撰の生産を増やせば量的には拡大するが、高級で質の良いもの（特定名称酒<sup>7)</sup>）への消費者の志向を反映して、今日では量より質、上級品の生産に力を入れている酒蔵が多く、生産量の減少のみで、清酒が好まれなくなったと断定することはできない。むしろ、

佐賀県では、後述するように「清酒ブーム」の渦中にあるとのことであった。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査結果より、現在でも清酒消費の多い市町をみると(第1表)、白石町、鹿島市、嬉野市、佐賀市、小城市の5市町が全消費量に占める割合で50%を超えている。これらは、県内でも酒造処か、その周辺地域であることがわかる。

同じくアンケート結果より、県内で好まれる主要銘柄についてふれる(第2表)。アンケートで、各店舗の売れ筋銘柄の1～4位を答えていただいた。表中の得点は、それぞれの店舗での1位を4点、2位を3点、3位を2点、4位を1点として点数化し、合算したものである。この内容について、少し紹介しよう。トップの「鍋島」は、「インターナショナル・ワイン・チャレンジ(IWC)2011」で、日本酒部門の最優秀賞を受賞している。このことがあって、佐賀県は、今、他県と違って、「瀬祭」に沸く山口県と並んで全国注目の清酒ブームの最中にあり、超人気となった「鍋島」も地元で消費されるというよりも、全国各地から引き合いが来て品不足状態にある。特約の条件も厳しいものがあるが、県内10市町で取り扱われている。「鍋島」は、鹿島市で生産される酒であるが、同市浜町から隣接する嬉野市塩田町にかけては、県内でも有数の酒造処として知られている。好まれる銘柄でも上位にきている「能古見」、「東一」、「東長」、「肥前蔵心」などがこの地で作られている。なお、地域別で佐賀県でも最も広く愛飲されているのが「東一」の14市町、次いで「鍋島」と並んで「能古見」の10市町となっている。これらに次ぐのが小城の「天山」、伊万里の「古伊万里」、みやきの「天吹」などであり、これらは凡県域ブランドといえる。これに対して、得点は高いが飲酒地域の狭い唐津の「太閤」、基山の「基峰

第2表 佐賀県内で好まれる清酒の主要銘柄

順位	銘柄	得点*1	嗜好市町数	酒蔵(本社所在地)
1	鍋島	58	10	富久千代酒造有限公司(鹿島市浜町)
2	能古見	51	10	有限会社馬場酒造場(鹿島市)
3	東一	46	14	五町田酒造株式会社(嬉野市塩田町)
4	天山	31	7	天山酒造株式会社(小城市)
5	太閤	24	2	鳴滝酒造株式会社(唐津市)
6	天吹	22	5	天吹酒造合資会社(みやき町)
7	東長	18	4	瀬頭酒造株式会社(嬉野市塩田町)
8	古伊万里「前」	18	6	古伊万里酒造有限公司(伊万里市)
9	窓乃梅	16	4	窓乃梅酒造株式会社(佐賀市久保田町)
10	基峰鶴	15	2	合資会社基山商店(基山町)
11	宮の松	11	2	合名会社松尾酒造場(有田町)
12	虎之児	10	1	井手酒造有限公司(嬉野市嬉野町)
13	肥前蔵心	8	3	矢野酒造株式会社(鹿島市)
14	万齢	7	3	小松酒造株式会社(唐津市相知町)
15	月桂冠	6	3	月桂冠株式会社(京都市伏見区)
16	白鶴	4	1	白鶴酒造株式会社(神戸市東灘区)
16	幡随院長兵衛	4	1	プライベートブランド
16	肥前杜氏	4	1	大和酒造株式会社(佐賀市大和町)
16	窓の月	4	1	大和酒造株式会社(佐賀市大和町)
20	浦霞	3	1	株式会社佐浦(宮城県塩竈市)
20	大関・丹波蔵	3	1	大関株式会社(兵庫県西宮市)
20	久保田	3	1	朝日酒造株式会社(新潟県長岡市)
20	瀬祭	3	1	旭酒造株式会社(山口県岩国市)
20	光武	3	3	合資会社光武酒造場(鹿島市浜町)
25	一ノ蔵	2	1	株式会社一ノ蔵(宮城県大崎市)
25	白鹿	2	1	辰馬本家酒造株式会社(兵庫県西宮市)
27	出羽桜	1	1	出羽桜酒造株式会社(山形県天童市)
27	吉乃川	1	1	吉乃川株式会社(新潟県長岡市)

資料: 県内小売酒販店57件に対する聴き取りアンケート。

\*1: 売れ筋銘柄のうち、各店舗1位銘柄を4点、2位を3点、3位を2点、4位を1点として合算した総得点。

鶴」, 有田の「宮の松」などは地域に根付いた地元の酒といえよう。

### b) 単式蒸留しょうちゅう

第2図, 福岡国税局の統計をみると, 単式蒸留しょうちゅうは, 1968・69(昭和43・44)年時点で年間わずか124kl, 全酒類消費量に占める割合が0.4%と, 一般にはほとんど飲まれない酒であったことがわかる。その後も長い低迷期が続き, 消費割合が5%を超えたのが1983(昭和58)年, 全国的に焼酎ブームが到来したといわれる2000(平成12)年時点でも, 6.8%であった。その後, ブームに乗って2004(平成16)年に消費量のピーク(5,908kl), 割合もようやく2桁(10.1%)となった。割合上のピークは, 2007(平成19)年の10.6%であり, ブームが去るとともに漸減して2014(平成26)年現在では4,585kl(割合9.3%)となった。ちなみに, 2006(平成18)年に量の上で単式蒸留しょうちゅうが清酒を上回って今日に至っている。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査結果より, 現在単式蒸留しょうちゅうの中で最大の消費量を持つイモ焼酎消費の多い市町をみると(第1表), みやき町, 多久市, 鳥栖市, 玄海町が40%を超えており, これらに次ぐのが上峰町, 伊万里市である。こうしてみると, イモ焼酎の消費中心は県東部と県西北部の2地域に分化していることがわかる。

イモ焼酎に次いで消費量の多いムギ焼酎の飲酒中心は, みやき町, 基山町, 神埼市・吉野ヶ里町と有田町が10%を超えている。これも県東部に飲酒嗜好の中心があることがわかる。コメ焼酎の消費量は多くないが, その中で, 江北町, 武雄市, 玄海町が6%を超えており, 分散的

第3表 佐賀県内で好まれる単式蒸留しょうちゅうの主要銘柄

順位	銘柄	得点*1	嗜好市町数	酒蔵(本社所在地)
1	黒霧島	89	16	霧島酒造株式会社(宮崎県都城市)
2	島美人	10	2	長島醸造有限会社(鹿児島県長島町)
3	いいちこ	10	4	三和酒類株式会社(大分県宇佐市)
4	さつま白波	9	3	薩摩酒造株式会社(鹿児島県枕崎市)
5	赤兎馬	5	2	濱田酒造株式会社(鹿児島県いちき串木野市)
5	鷹正宗 麦	5	2	鷹正宗株式会社(福岡県久留米市)
7	のんのこ黒	4	3	宗政酒造株式会社(佐賀県有田町)
7	萬世	4	1	萬世酒造株式会社(鹿児島県南さつま市)
7	ひむかのくろうま	4	2	神楽酒造株式会社(宮崎県高千穂町)
10	二階堂	3	2	二階堂酒蔵有限会社(大分県日出町)
10	白岳「しろ」	3	2	高橋酒造株式会社(熊本県人吉市)
10	魔王	3	1	白玉醸造合名会社(鹿児島県錦江町)
10	湧水	3	1	小正醸造株式会社(鹿児島市)
14	富乃宝山	2	1	西酒造株式会社(鹿児島県日置市)
15	明るい農村	1	1	株式会社 霧島町蒸留所(鹿児島県霧島市)
15	老岐ゴールド	1	1	玄海酒造株式会社(長崎県老岐市)
15	隠し蔵	1	1	濱田酒造株式会社(鹿児島県いちき串木野市)
15	黒伊佐錦	1	1	大口酒造株式会社(鹿児島県伊佐市)
15	黒泉山	1	1	宗政酒造株式会社(有田町)
15	大自然林	1	1	本坊酒造株式会社(鹿児島市, 生産:屋久島町)
15	三岳	1	1	三岳酒造株式会社(鹿児島県屋久島町)

資料: 県内小売酒販店57件に対する聴き取りアンケート。

\*1: 売れ筋銘柄のうち, 各店舗1位銘柄を4点, 2位を3点, 3位を2点, 4位を1点として合算した総得点。



ではあるが県西部で好まれている。

同じくアンケート結果より、県内で好まれる主要銘柄についてふれる(第3表)。佐賀県内消費において圧倒的に強いのがイモ焼酎の「黒霧鳥」(宮崎県都市)であり、16市町で愛飲されている点でも、清酒他の全銘柄を凌駕していることがわかる。これに次ぐのがムギ焼酎「いいちこ」(大分県宇佐市)であるが得点的にも飲酒地域が4市町という点でも差は大きい。これらの後に、鹿児島イモ焼酎「島美人」(鹿児島県長島町)、「さつま白波」(同県枕崎市)、「赤兎馬」(同県いちき串木野市)、「めちゃうま麦」(福岡県久留米市)、そしてようやく地元産「のんのこ黒」(佐賀県有田町)が出てくる。このように、単式蒸留しょうちゅうの消費を押し上げてきたのは、他県産焼酎の流入によることがわかる。

### c) 連続式蒸留しょうちゅう

佐賀県においては、単式蒸留しょうちゅうに比べると連続式蒸留しょうちゅうは、かつてわりと好まれてきた酒であった。第2図、福岡国税局の統計をみると、その消費量のピークは、統計のある初年度1964(昭和39)年の1,523klであり、全酒類消費量に占める割合が6.0%、当時は、単純計算で単式蒸留しょうちゅうの約11倍飲まれていた。ただこれは、単式蒸留しょうちゅうが当時、ほとんど飲まれていなかったためであり、清酒と比べると、約1/8と消費量は少ない。先に調査を行った熊本県の酒販店で聴き取れた話によると、連続式蒸留しょうちゅうは、安価大量生産が可能なおもあって、戦時中の配給で唯一消費者に回ってきた酒であり、その時期に味を覚えた人々に根強い人気があった。しかし、その後は、新規消費者が増えない中で、消費も漸減を続けてきた。1980~90年頃のチューハイブームを経て2004年以降の焼酎ブームの影響で、消費が微増に転じて現在に至っている。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査結果(第1表)より、現在連続式蒸留しょうちゅうの消費が10%を超えているのは、上峰町、みやき町、太良町、江北町の4町である。都市部でほとんど好まれなくなった連続式蒸留しょうちゅうが、縁辺の郡部で生き残っているといえよう。

同じくアンケート結果より、県内で好まれる主要銘柄についてふれる(第4表)。といっても、連続式蒸留しょうちゅうで出てくる銘柄は、わずか4種類である。伊万里、上峰で出てきた「宝」(京都市)、唐津の「ダルマ」(広島県廿日市市)、太良の「宝星」(鹿児島市)、佐賀市、玄海町の「ダイヤ」(東京都)が各地で飲まれている。

第4表 佐賀県内で好まれる連続式蒸留しょうちゅうの銘柄

順位	銘柄	得点*1	嗜好市町数	酒蔵(本社所在地)
1	寶(宝焼酎)	4	2	宝酒造株式会社(京都市伏見区)
1	ダルマ	4	1	中国醸造株式会社(広島県廿日市市)
3	寶星(宝星)	3	1	本坊酒造株式会社(鹿児島市)
4	ダイヤ	2	2	アサヒビール株式会社(東京都墨田区)

資料:県内小売酒販店57件に対する聴き取りアンケート。

\*1:売れ筋銘柄のうち、各店舗1位銘柄を4点、2位を3点、3位を2点、4位を1点として合算した総得点。

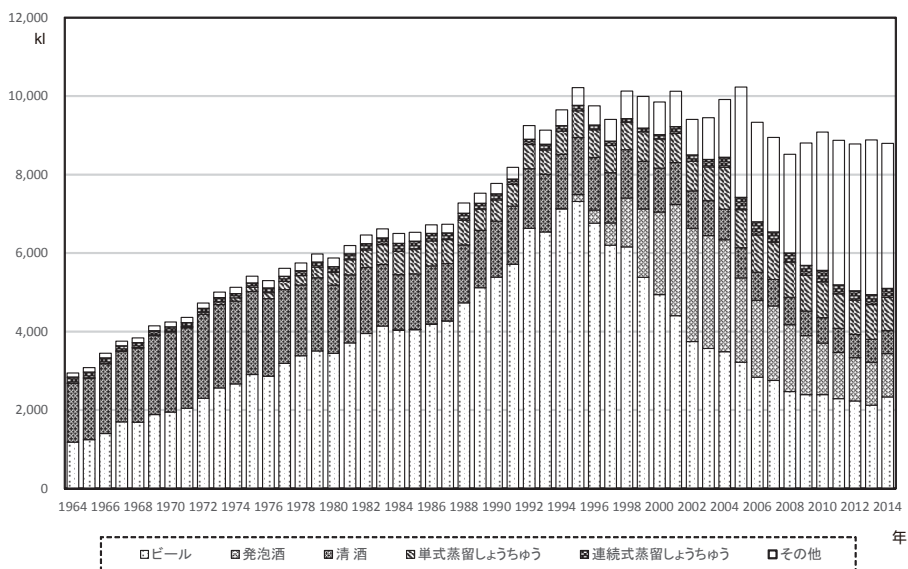
## 2) 地域ごとにみた飲酒嗜好の展開

ここでは、先にあげた5税務署管轄区ごとに、飲酒嗜好の展開をみていく。

### a) 鳥栖地区

『福岡国税局統計書』等より、佐賀県東部を占める鳥栖地区の酒類別消費量の推移をみると(第3図)、当初ビールよりも消費量の多かった清酒は、割合的には1966(昭和41)年に全酒類消費量に占める割合51.6%、量的には1972(昭和47)年に2,137klとピークを迎えた。その後はしかし、一貫した減少を続けて2014(平成26)年には、586kl(消費割合の6.7%)となった。連続式蒸留しょうちゅうのピークは、割合的には1964(昭和39)年の5.0%であり、以後微減傾向にあったものが、焼酎ブームの影響もあって2000(平成12)年まで底を打って微増に転じ、量的なピークが2006(平成18)年の328klとなっている。これらに対して単式蒸留しょうちゅうは、1965(昭和40)年時点で、わずか15kl(消費割合の0.5%)に過ぎなかったものが、その後漸増を続け2000(平成12)年以降の焼酎ブームに乗って2004(平成16)年に1,065kl(消費割合の10.7%)とピークを迎える。また、この年に初めて消費量上単式蒸留しょうちゅうが清酒を上回った。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査の結果をもとに、より詳細な分析を進めていこう。第4図より、現在当地区で最も好まれているのが清酒(ビール類を除く全酒類消費中の33.9%)であるが、イモ焼酎(同31.9%)とはほとんど差がない。それにムギ焼酎(同9.9%)、連続式蒸留しょうちゅう(同6.7%)が続いている。ちなみに、連続式蒸留しょうちゅうの消費割合は、5地区中で最も高くなっている。佐賀県内は、どこでも清酒消費を中心ベースとしているが、その多寡は、他の酒類の浸透具合による。その意味で当地区は、単式蒸留しょうちゅう

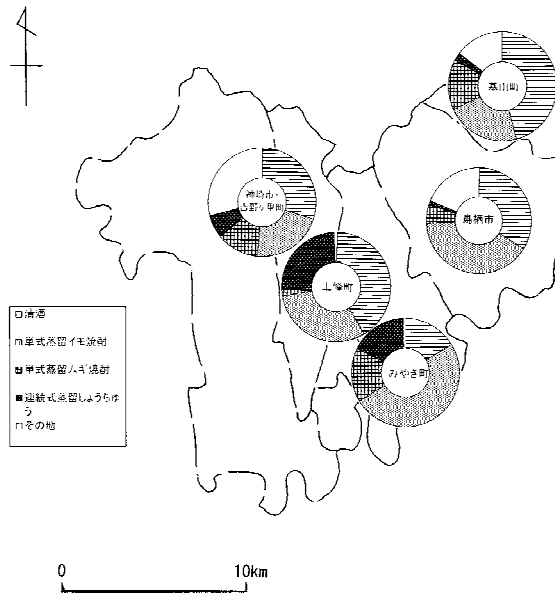


第3図 鳥栖地区酒類別消費量の推移

『福岡国税局統計書』他より作成。

う（特にイモとムギ）の流入と、連続式蒸留しょうちゅうの強さもあって、清酒消費が幾分減じている地域といえよう。

鳥栖地区の近年の状況についての小売酒販店のコメントをいくつか紹介しよう。「特に郡部で小売店の廃業が顕著で、酒販組合もその体をなしえなくなっている。客も高齢者が多く、若者が買いに来ない。」「1998（平成10）年頃から清酒の消費が減り、他県から流入する焼酎の消費が増えてきた。当初は、臭くなく飲みやすい「いいちこ」が売れたが、次第に「黒霧島」にシェアを奪われた。「黒霧島」がイモ焼酎でありながら、品質改良でそれほど臭くなくなったことが大きいと思われる。しかし現在は、再び清酒の時代が来ている。ただし、昔のように安かろう悪かろうではなく、いわゆる特定名称酒の質の良い酒が売れる。」「清酒に関して、佐賀県では一般に甘口が多いが、県東部では伝統的に辛口の酒が造られ、好まれてきた点が他地域と違うところである。」

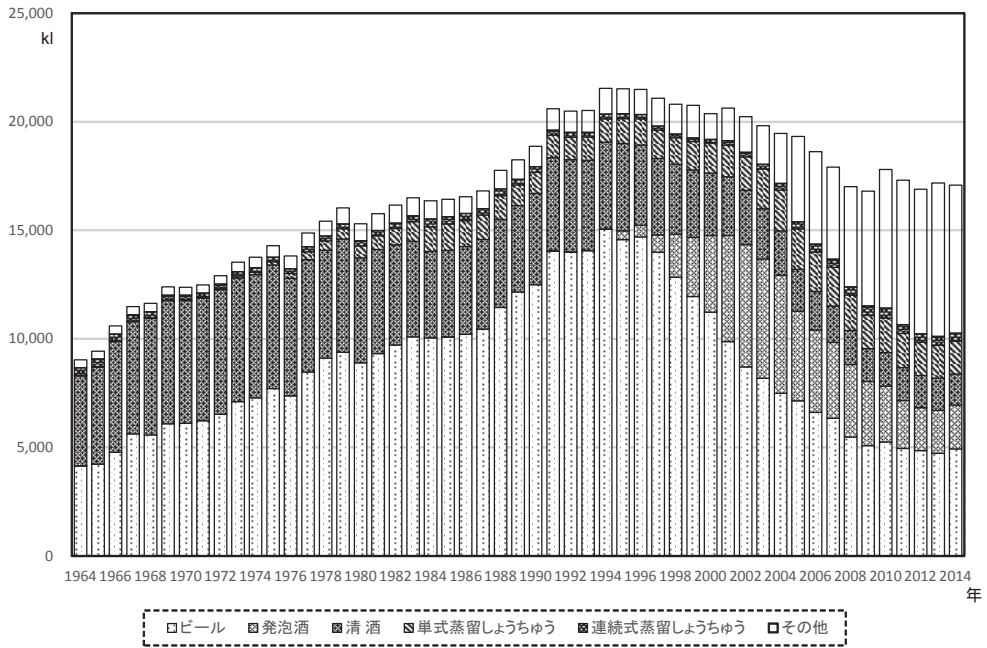


第4図 鳥栖地区における市町別主要酒類消費割合

地区内小売酒販店11件に対する聞き取りアンケートより作成。

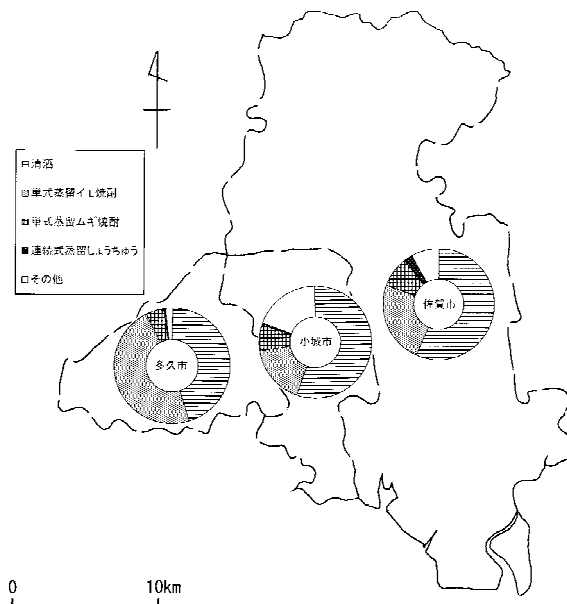
## b) 佐賀地区

『福岡国税局統計書』等より、佐賀県の中心的位置を占める佐賀地区の酒類別消費量の推移をみると（第5図）、統計上の初期消費量の上で、ビールと拮抗していた清酒は、割合的には1966（昭和41）年に全酒類消費量に占める割合が48.2%、量的には1972（昭和47）年に5,746klとピークを迎えた。その後はやはり、一貫して減少を続け、2014（平成26）年には、1,435kl（消費割合の8.4%）となった。連続式蒸留しょうちゅうは、当地区では昔からそれほど好まれてきた酒類ではない。そのピークは、割合的には1964（昭和39）年の3.8%であり、以後微減傾向にあったものが、焼酎ブームの影響もあって2000（平成12）年で底を打って微増に転じ、量的な



第5図 佐賀地区酒類別消費量の推移

【福岡国税局統計書】他より作成。



第6図 佐賀地区における市別主要酒類消費割合

地区内小売酒販店15件に対する聞き取りアンケートより作成。

ピークが2010（平成22）年の457klとなっている。これらに対して単式蒸留しょうちゅうは、1964（昭和39）年時点で、わずか30kl（消費割合の0.3%）に過ぎなかったものが、その後漸増し、焼酎ブームの最中にあった2004（平成16）年に量的なピーク（1,882kl）、2006（平成18）年には清酒消費量を超え、2007（平成19）年に割合上のピーク（9.9%）となって、ブーム後に微減に転じて今日に至っている。消費動向は、先述の鳥栖地区に似ているが、鳥栖と比べると、依然として清酒の強さが特徴の地域といえよう。

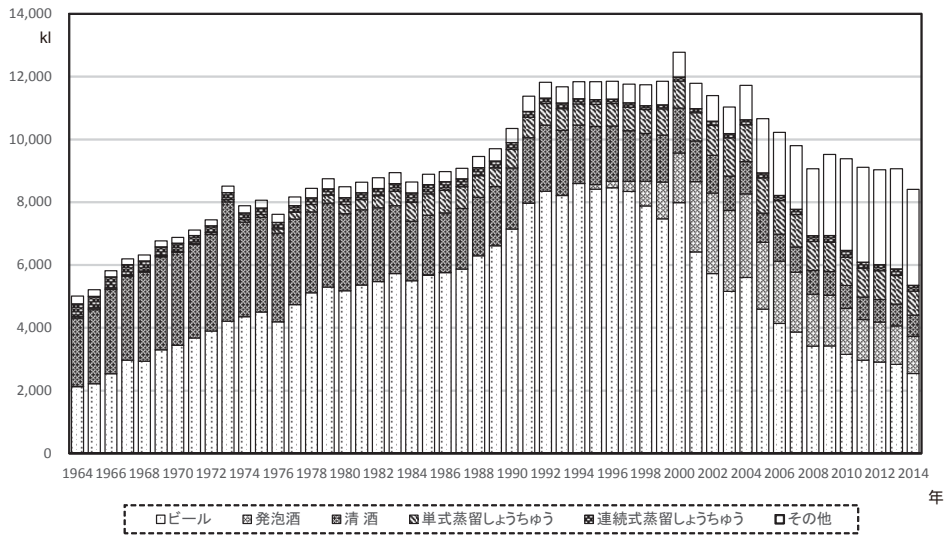
小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査の結果（第6図）をみると、現在当地区で最も好まれているのがやはり、清酒（ビール類を除く全酒類消費中の54.9%）であり、これに次ぐイモ焼酎の消費割合が25.7%であることからみても、伝統的に清酒の強い地域であることがわかる。これらに次ぐのがムギ焼酎（同8.1%）であり、他は、連続式蒸留しょうちゅうを含めて量的には少ない。ただ、当地区内でも多久市は、他と違って清酒よりもむしろ、イモ焼酎の好まれる地域である。この点について、小売店によると、多久には昔炭坑が多くあって、炭坑夫に焼酎が圧倒の人気があった名残で、今も焼酎が好まれるということであった。

佐賀地区の近年の状況についての小売酒販店のコメントをいくつか紹介しよう。「昔、父の代には何でも売れたが、今はお客さんが酒に詳しくて、よいもの、特定名称酒でないと売れない。そういった意味では、安い酒をおもに扱うディスカウントも苦しいわけで、最終的にはがんばる小売専門店が生き残れると思う。」「お客の好みとして、しっかりとした味わいの一方でアルコール度数は軽めという矛盾したものが求められる。」「一昔前は、新潟の淡麗辛口が好まれたが、今は佐賀の芳醇旨口の酒の評判が上がって売れてきているのでうれしい。地元関係者（特に佐醸会）のがんばりとPRの成果だと思う。」「イモ焼酎は、何でもござれというブームの時期が去って、固定銘柄になりつつあり、他の商品が売れなくて苦しい。」

### c) 唐津地区

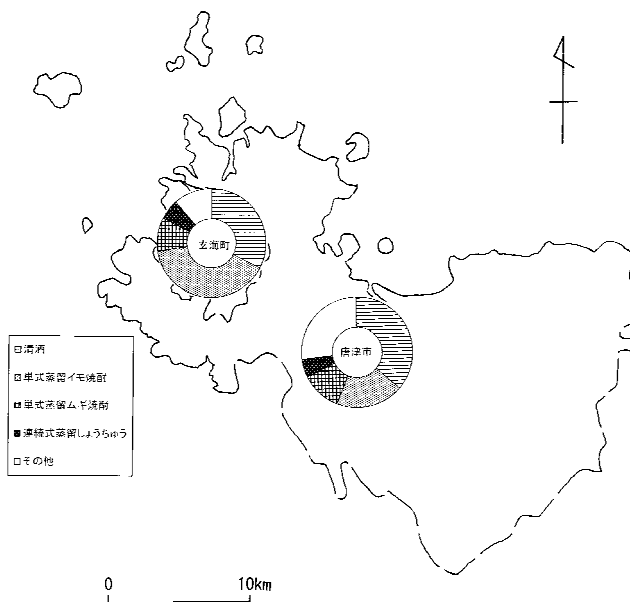
『福岡国税局統計書』等より、佐賀県北部の中心都市である唐津市を抱える唐津地区の酒類別消費量の推移をみると（第7図）、統計上の初期に消費量の上で、ビールと拮抗していた清酒は、割合的には1966（昭和41）年に全酒類消費量に占める割合が46.1%、量的には1973（昭和48）年に3,803klのピークを迎えている。その後はやはり一貫して減少を続けて2014（平成26）年には、696kl（消費割合の8.0%）となった。連続式蒸留しょうちゅうのピークは、統計上の初年度である1964（昭和39）年の401kl（消費割合の8.0%）であり、鳥栖・佐賀地区と比べても消費量が多かったが、その後は漸減し、2000（平成12）年以降焼酎ブームの影響もあって微増に転じて現在に至っている。これらに対し、単式蒸留しょうちゅうは、1969（昭和44）年時点で最少の36kl（消費割合の0.5%）に過ぎなかったものが、その後漸増し、焼酎ブーム最中の2003（平成15）年に1,220kl（消費割合の11.1%）のピークとなった。しかし、ブームの去った2008（平成20）年以降急減し、2014（平成26）年には、763kl（消費割合の9.1%）にまで落ち込んでいる。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査の結果（第8図）をみると、現在当地区で最も好まれているのがやはり、清酒（ビール類を除く全酒類消費中の35.6%）であり、これに次ぐイモ焼酎の消費割合が24.3%、さらにムギ焼酎が11.4%、連続式蒸留しょうちゅうが5.4%、コメ焼酎が4.2%となっている。これらの中では、特にムギ焼酎の消費割合が、5地区中で最も高くなっているところに地域の特徴が見いだせる。



第7図 唐津地区酒類別消費量の推移

『福岡国税局統計書』他より作成。



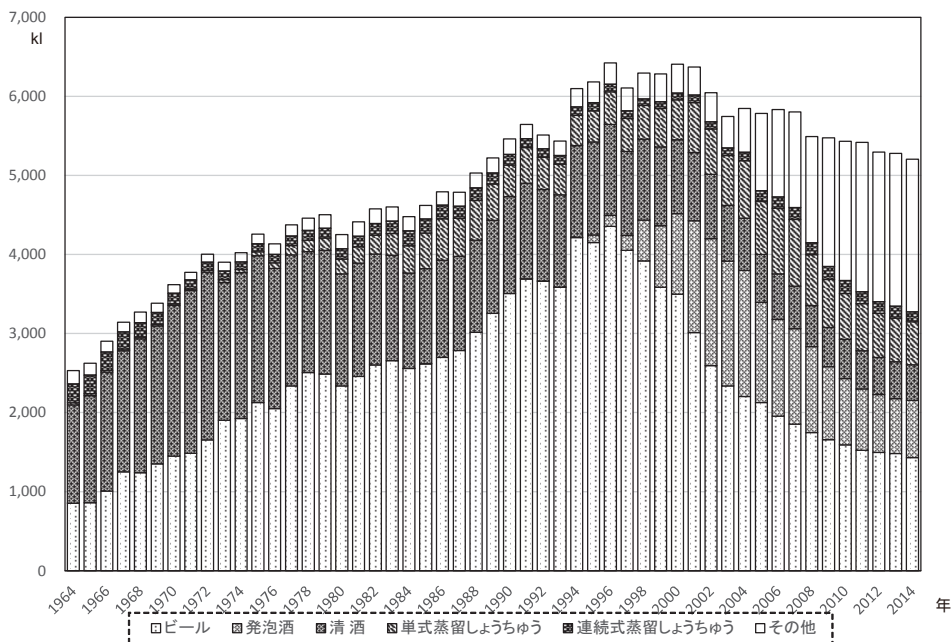
第8図 唐津地区における市町別主要酒類消費割合

地区内小売酒販店9件に対する聞き取りアンケートより作成。

唐津地区の近年の状況についての小売酒販店のコメントをいくつか紹介しよう。町場では「ブーム後にイモ焼酎から日本酒にシフトしてきた。やはり、魚には地酒が合うとお客さんが気づいてきたからであろう。」「焼酎ブームは、ムギの「いいちこ」から始まったが、当初品薄でなかなか入荷しなかったため、代わりに「ひむかのくろうま」が入って定着した。その後、イモ焼酎に売れ筋が変わった。」また、郡部では「昔は中央メーカーの清酒が強かったが、14～15年前から地酒である「太閤」のシェアが大きく拡大して定着した。」「少子高齢化で愛飲者が減り続けている。若者の酒離れも顕著で、飲んでくれる人はより安い酒へと流れている。」

#### d) 伊万里地区

『福岡国税局統計書』等より、伊万里地区の酒類別消費量の推移をみると（第9図）、統計上の初期に消費量においてビールをはるかに凌駕していた清酒は、割合の上では1971（昭和46）年に全酒類消費量に占める割合が54.5%、量的には1972（昭和47）年に2,121klというピークを迎える。その後はやはり、他の地区と同じように漸減し、2014（平成26）年には452kl（消費割合の8.7%）となった。連続式蒸留しょうちゅうのピークは、統計上の初年度である1964（昭和39）年の239kl（消費割合の9.4%）であった。このピーク時での消費割合は、実は5地区中で最も高い。すなわち、かつて最も連続式蒸留しょうちゅうが好まれる地域であった。これも他地区同様その後漸減し、1998（平成10）年に底を打った（消費量83kl、消費割合の1.3%）後、焼酎ブーム下で増加に転じて2010（平成22）年に164kl（消費割合の3.0%）を記録するが、その後は微減を続けて現在に至っている。これらに対して、単式蒸留しょうちゅうは、1969（昭和44）



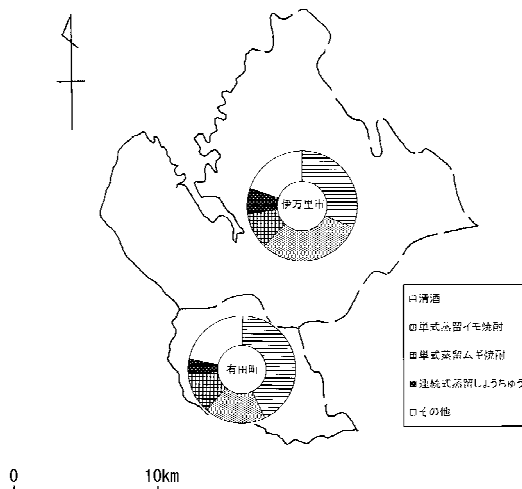
第9図 伊万里地区酒類別消費量の推移

『福岡国税局統計書』他より作成。

年時点で最少の36kl（消費割合の0.5%）に過ぎなかったものが漸増を続け、焼酎ブームの最中の2003（平成15）年には1,220kl（消費割合の11.1%）となった。その後微減を続けながら現在に至っている。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査の結果（第10図）をみると、現在当地区で最も好まれているのがやはり、清酒（ビール類を除く全酒類消費中の35.2%）であり、これに次ぐイモ焼酎の消費割合が26.6%、さらにムギ焼酎が11.2%、連続式蒸留しょうちゅうが6.5%、コメ焼酎が4.4%となっている。この中で連続式蒸留しょうちゅうが、鳥栖地区と並んで好まれていることが、当地区の特徴といえよう。

伊万里地区の近年の状況についての小売酒販店のコメントをいくつか紹介しよう。「焼酎が変わらず強いが、清酒（純米酒）が最近伸びてきている。」「焼酎が少し落ちてきた。和食にあうのはやはり日本酒、地酒が好まれる。」「明るくすると酒が劣化するので、店内の照明を落とすことにも気がつかっている。」「前は有名銘柄を買いに来るマニア的なお客が多かったが、今は名前よりも味で選ぶようになってきた。」

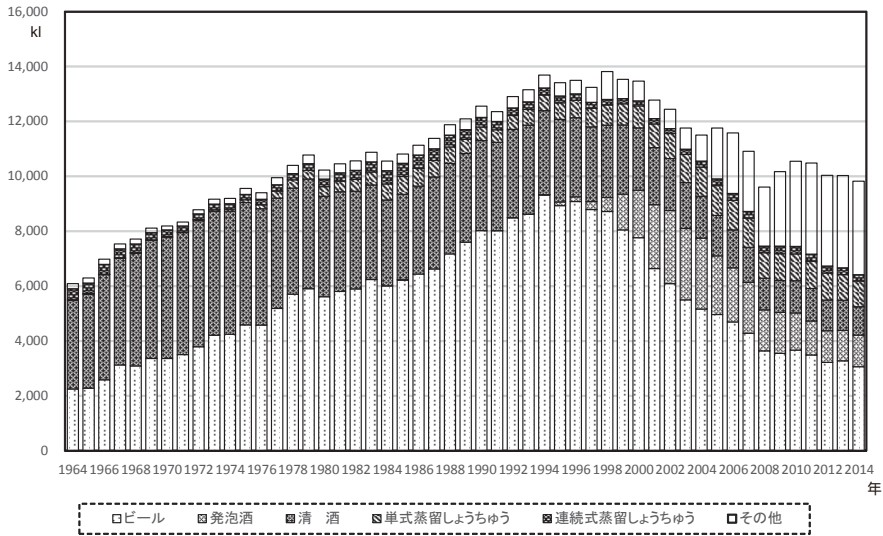


第10図 伊万里地区における市町別主要酒類消費割合  
地区内小売酒販店6件に対する聴き取りアンケートより作成。

#### e) 武雄地区

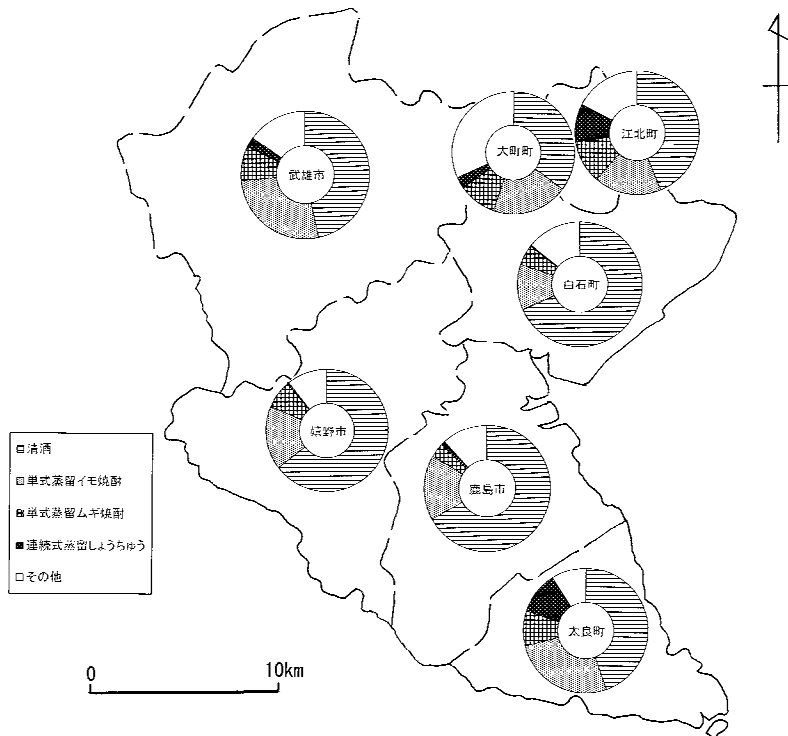
『福岡国税局統計書』等より、武雄地区の酒類別消費量の推移をみると（第11図），統計上の初期においてビールをはるかに凌駕していた清酒は，割合の上では1966（昭和41）年に全酒類消費量に占める割合が54.9%，量的には1972（昭和47）年に4,598klというピークを迎える。その後はやはり，他の地区と同じように漸減し，2014（平成26）年には1,036kl（消費割合の10.6%）となった。連続式蒸留しょうちゅうのピークは，割合上では1964（昭和39）年の6.4%であったが，以後漸減した後，量の上では，他地区に遅れていわゆるチューハイブーム期であった1984（昭和59）年の480klであった。その後再び漸減に転じたが，2000（平成12）年に底を打って再び漸増しつつ現在に至っている。これらに対して，単式蒸留しょうちゅうは，1969（昭和44）年





第11図 武雄地区酒類別消費量の推移

『福岡国税局統計書』他より作成。



第12図 武雄地区における市町別主要酒類消費割合

地区内小売酒販店16件に対する聞き取りアンケートより作成。

時点で最少の17kl（消費割合の0.2%）に過ぎなかったものが漸増を続け、焼酎ブーム末期の2005（平成17）年に量の上でのピーク1,087kl、割合の上では2007（平成19）年と2012（平成24）年に9.8%のピークがみとめられる。こうしてみると、最新時点での清酒の全酒類消費に占める割合が2桁台なのは、5地区中で武雄地区のみであり、当地区は、特に清酒の強い地区といえることができる。

小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査の結果（第12図）をみると、現在当地区で最も好まれているのがやはり、清酒（ビール類を除く全酒類消費中の56.4%）であり、これに次ぐイモ焼酎の消費割合が18.6%、さらにムギ焼酎が7.6%、コメ焼酎が3.7%、連続式蒸留しょうちゅうが3.4%に過ぎないことから、当地区における清酒消費の強さが理解される。清酒が特に強いのが鹿島・嬉野両市と白石町であり、県内有数の清酒産地が、そのまま消費中心となっていることがわかる。一方で、地域別にみていくと、その様相はやや違ってくる。例えば、温泉観光地である武雄市は、福岡県からの観光客に対応する形でイモ焼酎の割合が比較的高いし、大町町や江北町でムギ焼酎、江北町では連続式蒸留しょうちゅうが高くなっているのは、旧炭坑町としての名残かもしれない。また、太良町でも連続式蒸留しょうちゅうの割合が高いのは、同酒類が県の縁辺部に残っている例でもある。

武雄地区の近年の状況についての小売酒販店のコメントをいくつか紹介しよう。「食の多様化、嗜好の変化から、濃厚甘口清酒から吟醸酒やワインへと客の嗜好が変化しつつある。」「有明海のくせのある魚には、パンチのある酒があう。昔、大町に炭坑があった頃は、連続式蒸留しょうちゅうが圧倒的に人気があった。その後、焼酎、そして清酒へ」「若い方で清酒、特に特定名称酒を好まれる方が増えた。」「飲酒の習慣が変化してきた。昔は、晩酌で毎日飲まれる方が多かったが、最近のご夫婦でゆっくりとワンランク上の清酒を楽しまれる方が増えてきた。」「今は、地元のいい清酒が好まれる。実は20年ほど前にも同じような傾向があったが、いい酒に高い価格設定をしたことで清酒離れが起きて焼酎ブームへと突き進む結果となった。そういう意味では、今後の傾向も不透明なところがある。」「普通酒は、量販店に流れてしまったので、15年ほど前から地酒純米酒にこだわって扱ってきた。お客も店を使い分けていて、晩酌用は量販店、進物などで専門小売店を利用される。」「近年は、県内産のよいお酒を売る店が増えてきて過当競争気味の点が困る。」「お客は地元の方が多い。白石町のこのあたりでは、余裕のある50歳代の方とよい酒の味を覚えた30歳代の方が純米吟醸酒を好まれるが、40歳代の方は仕事が忙しいのか、飲む人がなぜか少ない。」「鹿島の地元で評価の高い酒を売っている。最近では遠方（長崎・福岡県）からの店買いの方とインターネット注文が半々ぐらいといったところである。」「太良町では昔は、連続式蒸留しょうちゅうの「ダイヤ」や「宝星」が受けていたが、いつの間にかイモ、ムギの単式蒸留しょうちゅうに変わった。」

#### 4. 佐賀県域における飲酒嗜好地域区分の設定

前章では、統計および小売酒販店に対する聴き取りアンケート調査データをもとに、佐賀県内5地区ごとの飲酒嗜好に関する地域的特性について言及してきた。本章では、前章を受けて住民の飲酒嗜好からみた佐賀県域の地域区分を試みる。その前に、当県における飲酒嗜好地域形成の歴史的な経緯について解説する。

佐賀県は、伝統的に清酒文化圏に属する地域であった。清酒造りの歴史も定かではないが、

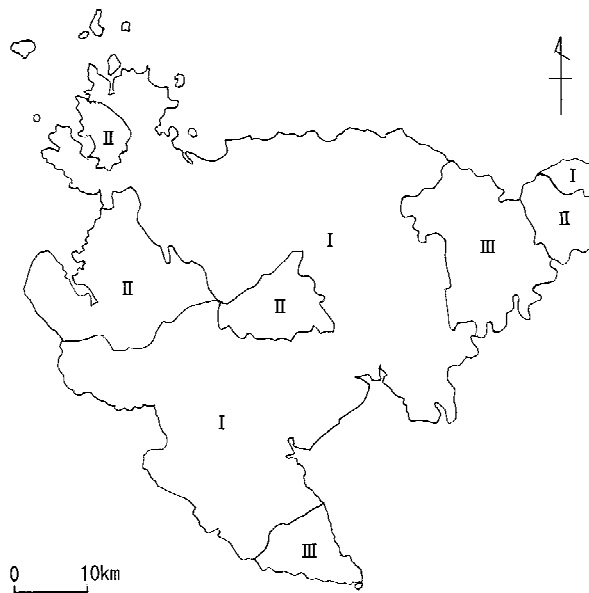
現在、県酒造組合に所属している27社に限って創業年をみると、最も古い元禄元年の窓乃梅酒造を始め、江戸時代創業の企業が約半分の13社ある。その他、明治期創業が8社、大正期が3社、昭和以降は、それ以前に操業のあった数社が合併新設したものなど3社に過ぎない<sup>8)</sup>。こういった古い歴史を持つ清酒製造・嗜好地域に、わが国では、1910（明治43）年から生産が始まり、大正期を通じて生産が拡大した連続式蒸留しょうちゅうが入り込んでくる。特に戦時中、安価に大量生産が可能な連続式蒸留しょうちゅうが配給酒とされたことで、同酒の消費が一挙に拡大する<sup>9)</sup>。しかし、その後、徐々に消費が減じるとともに、消費地域も高齢化のより進んだ県の縁辺部へと、いわゆる「文化圏論」<sup>10)</sup>的理由で追いやられてくる。さらに、明治半ばより佐賀県各地で炭坑開発が進み、炭鉱労働者が県外から多数流入するようになった。彼らが、安価で高度数の酒を好んだこともあって、焼酎類が県内に入り込むことになる。さらに、2000（平成12）年以降の全国を席卷した焼酎（単式蒸留しょうちゅう）ブームの波が佐賀県に及ぶ。ただし、当初、佐賀県には単式蒸留しょうちゅうの製造所がなかったため、これらは、他県から全面的に持ち込まれるものであった。初期には臭いがなく飲みやすいということで大分や宮崎県産のムギ焼酎が、それに続いて宮崎・鹿児島県産の本格イモ焼酎が流入して県内一円に広がった。

こういった飲酒嗜好地域の形成の歴史を経て、現在みとめられる地域区分を示したのが第13図である。図でわかるように、佐賀県の飲酒嗜好地域はⅠ～Ⅲに分けることができる。本図について解説しよう。

Ⅰ「清酒嗜好卓越型」 今日でも伝統的な文化地域が残っている地域、さらに、近年の佐賀地酒ブームに乗って新展開した地域が含まれている。ここは、同時に現在でも佐賀県内で清酒醸造所が中心的に分布する生産-消費が直結する地域でもある。

Ⅱ「単式蒸留イモしょうちゅう・清酒嗜好拮抗型」 例えば、鳥栖市は、九州の交通ターミナルとして九州中東西南北の飲酒文化が交差する地域であり、伝統的な清酒嗜好に加えていち早く南九州のイモ焼酎のシェアが拡大した地域である。また、多久市は、かつての炭鉱地であり、根強い焼酎嗜好がみとめられる。この他、県の縁辺部である玄海町や伊万里市がこれに含まれている。

Ⅲ「清酒・単式蒸留イモしょうちゅう・単式蒸留ムギしょうちゅう・連続式蒸留しょうちゅう嗜好拮抗型」 この型は、県の縁辺部に位置する2地域が含まれる。このうちの東部の三養基・神埼地区は、ムギ、イモの順に県外、すなわち福岡方面から入ってきた焼酎ブームの最も大きな影響を受けた地域であり、同時に県の縁辺部として連続式蒸留しょうちゅう嗜好も根強い結果、この型となっている。一方の太良町は、伝統的な清酒嗜好に加えて、名物であるカニやカキなどの海産物、温泉などの存在で、福岡県あたりからの観光客の流入が大きい地域であり、そういった観光客の嗜好もあってイモ、ムギ嗜好がみとめられる他、伝統的に連続式蒸留しょうちゅうの強い地域でもある。



第13図 佐賀県域における飲酒嗜好地域の展開

## 5. 結 び

本稿の目的は、佐賀県域で、まず①税務署管内ごとの飲酒嗜好とその変容について把握すること、②より詳細な分析を通じて佐賀県域に展開する地域的な飲酒嗜好圏の析出を試みる。その上で、③わが国の清酒文化圏の飲酒嗜好とその変容について展望することである。研究の成果をまとめると、以下ようになる。

1. 佐賀県域における独自の飲酒嗜好文化は、常に東接する福岡県方面から波及するブームと称される文化的な波の影響を強く受けてきた。
2. 酒類別飲酒嗜好について清酒をみると、消費量の減少が著しい。ただし、これはいわゆる普通酒とされる大量生産酒の減少が著しいためであり、上級の特定名称酒に関しては近年好調であり、佐賀酒ブームというべき状況となっている。
3. 単式蒸留しょうちゅうは、消費量が年々増加し、いわゆる焼酎ブーム末期の2007（平成19）年にピークとなったが、ブームが去って漸減傾向にあり、多くの銘柄（業者）が淘汰されて、特定銘柄のみ生き残っているような状況である。
4. 連続式蒸留しょうちゅう消費は、漸減を続けてきた。1980～90年頃のチューハイブームと2004年以降の焼酎ブームの影響で、消費が微増に転じて現在に至っている。地域的には、県の縁辺部での消費が大きい。
5. 地区別に飲酒嗜好の特徴をみると、a)鳥栖地区は、単式蒸留しょうちゅう（特にイモとムギ）の流入と、連続式蒸留しょうちゅうの強さもあって、清酒消費が幾分減じている地域である。b)佐賀地区は、伝統的に清酒嗜好の強い地区である。ただし、多久は、旧炭鉱地として焼酎消費嗜好が根強い。c)唐津地区も、清酒嗜好の強い地区である。それ以外で

はムギしょうちゅうの消費割合が5地区中で最も高い。d)伊万里地区は、清酒・イモ消費嗜好が拮抗するが、連続式蒸留しょうちゅうの消費割合も鳥栖地区と並んで高い。e)武雄地区も、清酒消費の強い地区である。特に強いのが鹿島・嬉野両市と白石町であり、県内有数の清酒産地が、そのまま消費中心となっている。一方で、地域別にみていくと、温泉観光地である武雄市はイモ焼酎の割合が高いし、大町町や江北町でムギ焼酎、江北町や太良町で連続式蒸留しょうちゅう嗜好が強いのは、それが県の縁辺部に残っている例である。

6. 佐賀県域における飲酒嗜好地域は、Ⅰ「清酒嗜好卓越型」清酒嗜好が強い伝統の系譜を引く地域である。現在でも佐賀県内で清酒醸造所が中心的に分布する生産-消費が直結する地域でもある。Ⅱ「単式蒸留イモしょうちゅう・清酒嗜好拮抗型」鳥栖市は、九州中東西南北の飲酒文化が交差する地域であり、伝統的な清酒嗜好に加えていち早く南九州のイモ焼酎のシェアが拡大した。多久市は、かつての炭鉱地で根強い焼酎嗜好がみとめられる。Ⅲ「清酒・単式蒸留イモしょうちゅう・単式蒸留ムギしょうちゅう・連続式蒸留しょうちゅう嗜好拮抗型」この型は、県の縁辺部に位置する2地域が含まれる。このうちの東部の三養基・神埼地区は、福岡方面から入ってきた焼酎ブームの最も大きな影響を受けた地域であり、同時に県の縁辺部として連続式蒸留しょうちゅう嗜好も根強い。太良町は、伝統的な清酒嗜好に加えて、福岡県あたりからの観光客の流入が大きく、観光客の嗜好もあってイモ、ムギ嗜好がみとめられる他、伝統的に連続式蒸留しょうちゅうの強い地域である。

以上、佐賀県域における飲酒嗜好に関する研究について、所期の目的をある程度達成できたと考える。調査上の問題をあげる。今回も、宮崎、熊本、大分各県域での調査と同じく、地域的な嗜好を反映する小売酒販店での聴き取りアンケート調査を行った。ただ、前回までの調査と違った想定外のこととして、佐賀県域では、地産の特定名称酒を取り扱うことでブームに乗り、全国的に顧客を獲得して経営が良好な店舗と、取り扱うことができずに経営のきわめて厳しく廃業寸前の店舗との小売酒販店間での分化が顕著であったことである。後者は、地域のファンが離れて嗜好を反映しえなくなっているし、羽振りのよい前者も、全国的嗜好を捉えるにはよいが、地域的な飲酒嗜好を反映しているとは言いがたい。したがって、小売酒販店での聴き取りアンケート調査が、最もよい方法であったかどうかについては再検討を要する。ただ、一般住民の酒類購入の大口となっている量販店を対象としたとしても、それが当該地域の飲酒嗜好を反映しているとは必ずしも言いがたい<sup>11)</sup>。なお、今回の調査では、国税庁の統計データである程度捕捉することで、地域の特徴を把握することができた。

全国的には、焼酎ブームが一段落して、次に何が来るのかが問われているが、こと佐賀県では、日常酒としての焼酎や普通酒だけでなく、質のよい清酒を中心とした、より成熟した飲酒嗜好の展開がみとめられた。

[付記]現地調査では、佐賀県酒造組合の山崎みち子主事他関係者にお世話になった。とりわけ、小売酒販店の皆様方にご厚情を賜ることで聴き取りアンケート調査を遂行し、貴重なお話を伺うことができた。本来ならば皆様方のお名前をお一人お一人列挙して感謝申し上げるべきところであるが、紙面の都合もあるので、ここではそれは控えるが、記して厚く感謝申し上げます。なお、本稿の骨子については、2017年度日本地理学会春季学術大会において発表した。

## 注

- 1) 福岡国税局：「税務署別酒類販売（消費）数量」（同：『福岡国税局統計書』，1999年まで）。2000年以降はwebページ：<https://www.nta.go.jp/fukuoka/kohyo/tokei/index.htm>。
- 2) 調査店舗数の市町別内訳は、佐賀市10件、唐津市7件、鳥栖市4件、多久市2件、伊万里市4件、武雄市2件、鹿島市2件、小城市3件、嬉野市4件、神崎市・吉野ヶ里町3件、基山町2件、上峰町1件、みやき町1件、玄海町2件、有田町2件、大町町2件、江北町1件、白石町3件、太良町2件の計57件である。なお、1行政区当たり最低複数件の調査を試みたが、地域内に酒販小売店が1件しかないところもあって上記調査件数となった。なお、吉野ヶ里町では回答が1件も得られなかったため、神崎市郡として神崎市と合わせて分析した。
- 3) 調査は、①2015年11月28・29日（県東、鳥栖～佐賀市方面）、②2015年12月19・20日（唐津・伊万里～佐賀市の一部）、③2016年2月18～20日（①、②回での調査の残38件）の3回に分けて、一部学生の協力を得て実施した。
- 4) 本章については、佐賀県（2016）：「佐賀県の紹介」、佐賀県webページ：<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji0032157/index.html>。同（2016）：「佐賀県のすがた2016」、佐賀県webページ：<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji0037732/index.html>。および五十嵐勉（2012）：「県の性格」（野澤秀樹・堂前亮平・手塚章編：『日本の地誌10九州・沖縄』，朝倉書店，pp.198-202を参照した。
- 5) 佐賀県の酒造業を担う若手の集う「佐醸会」がリードして協力体制ができたこととされる。
- 6) 2015年11月18日、佐賀県酒造組合主事山崎みち子氏に対する聴き取り調査による。また、佐賀県産酒の状況に関する事情については、佐賀県農林水産商工本部流通課（2016）：「The Saga 認定酒」（同：「美食通信「ごちそう佐賀」」，同課webページ：<http://gochiso-saga.com/premium/sagasake.php>。
- 7) 特定名称酒とは、1989（平成元）年に定められた「清酒の製法品質表示基準」（国税庁告示第8号）に示された以下の8の普通酒ではないもの。吟醸酒（精米歩合60%以下，米，米麴，醸造アルコール添加），大吟醸酒（精米歩合50%以下，米，米麴，醸造アルコール添加），純米酒（精米歩合規定なし，米，米麴のみ使用），純米吟醸酒（精米歩合60%以下，米，米麴のみ使用），純米大吟醸酒（精米歩合50%以下，米，米麴のみ使用），特別純米酒（精米歩合，60%以下又は特別な製造方法，米，米麴のみ使用），本醸造酒（精米歩合70%以下，米，米麴，醸造アルコール添加），特別本醸造酒（精米歩合60%以下又は特別な製造方法，米，米麴，醸造アルコール添加）。国税庁（2016）：「清酒の製法品質表示基準」の概要，同webページ：<http://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/hyoji/seishu/gaiyo/02.htm>。
- 8) 各社，および佐賀県酒造組合（2016）：「佐賀の酒蔵紹介」，同webページ：<http://www.sagasake.or.jp/main/4.html>による。
- 9) 中村周作（2012）：『熊本 酒と肴の文化地理 - 文化を核とする地域おこしへの提言 -』，熊本出版文化会館，p.41。
- 10) 文化圏論とは、柳田国男が『蝸牛考』（刀江書院，1930）において発表した「文化の伝播は、あたかも石を投げ入れた時の水紋のように、中心から周辺に同心円状に波紋が広がり、やがて消えていく。すなわち、中央に新しいものが周辺にその一段前のものが展開するという説」である。佐野賢治（1999）：「周圏論」（福田アジオ他編：『日本民俗大辞典 上』），吉川弘文館，pp.811-813。
- 11) 量販店は、安価な商品を求めて遠方から車で来店する機会が多く、地域の飲酒嗜好を反映しているとは言いがたいので、調査対象から除外してきた。

## 文献他

- 青木隆浩 (2003) : 『近代酒造業の地域的展開』, 吉川弘文館, 258p。
- 五十嵐勉 (2012) : 「県の性格」(野澤秀樹・堂前亮平・手塚章編 : 『日本の地誌10 九州・沖縄』, 朝倉書店, pp. 198-202。
- 白井麻未・張貴民 (2010) : 「酒に関する地理学的研究の現状とその課題」, 愛媛大学教育学部紀要57, pp. 227-236。
- 北島常一 (1971) : 「酒風土記 佐賀」, 日本醸造協會雑誌66-12, pp. 1156-1158。
- 国税庁 (2016) : 「清酒の製法品質表示基準」の概要, 同webページ : <http://www.nta.go.jp/shiraberu/senmonjoho/sake/hyoji/seishu/gaiyo/02.htm>。
- 佐賀県 (2016) : 「佐賀県の紹介」, 佐賀県webページ : <http://www.pref.saga.lg.jp/kiji0032157/index.html>。
- 佐賀県 (2016) : 「佐賀県のすがた2016」, 佐賀県webページ : <http://www.pref.saga.lg.jp/kiji0037732/index.html>。
- 佐野賢治 (1999) : 「周圏論」(福田アジオ他編 : 『日本民俗大辞典 上』), 吉川弘文館, p. 811-813。
- 時吉修・中村周作 (2004) : 「宮崎県域における飲酒嗜好にみる地域性」, 立命館地理学16, pp. 55-69。
- 中村周作 (2009) : 『宮崎だれやみ論 - 酒と肴の文化地理 -』, 鈺脈社, 141p。
- 中村周作 (2012) : 『熊本 酒と肴の文化地理 - 文化を核とする地域おこしへの提言 -』, 熊本出版文化会館, 215p。
- 中村周作 (2014) : 『酒と肴の文化地理 - 大分の地域食をめぐる旅 -』, 原書房, 179p。
- 日本蒸留酒酒造組合 (2016) : 「焼酎甲類の歴史」, 同webページ : <http://www.shochu.or.jp/whats/history2.html>。
- 松田松男 (1999) : 『戦後日本における酒造出稼ぎの変貌』, 古今書院, 316p。